

青年ヘーゲル学派とマルクス（I）

別 府 芳 雄

はしがき

周知のように左派ヘーゲル学派がマルクスの思想形成において占める位置はきわめて重要である。彼らはヘーゲルの教説から急進的な結論をひき出した連中である。彼らは青年ヘーゲル学派として知られマルクスもこれに属していた。青年ヘーゲル学派の中心はベルリン大学であった。ヘストルーゲを除けば、青年ヘーゲル学派の連中は、すべてが子弟を大学にやれるだけの経済的余裕のある富裕な中産階級の家庭の出身であった。彼らは、まず優秀な傑材の集合であったし、彼ら相互のあいだの関係の特徴というべき点は、相互間でいつも相手を凌駕しようとしていたことであり、さらに彼らは数年間にわたってマルクスと協働した人びとでもあった。マルクスはのちに彼らと訣別してしまうが、彼らがマルクスの思想形成に与えた影響は測りがたいものがある。以下マルクスとの関連をたどりながら述べていくことにしよう。

ちなみに青年ヘーゲル学派の指導的中心人物はブルーノ・バウアーとその弟のエドガー・バウアーであった。訣別にいたるまで彼らがマルクスといかに協同し、いかに懇切にマルクスを指導し、マルクスに強烈な影響を与えたか測りがたい。バウアーなくんば青年ヘーゲル学派の思想形成はありえなかった。省みてバウアーの研究たるやわが国においては皆無にひとしい。願わくば本学々生諸君がバウアー研究に関心を寄せられんことを。マルクスの思想形成の正しい理解はかくして始めて達せられるであろう。

1. ヘーゲルの死後

1818年にベルリン大学教授となったヘーゲルは、その整然たる包括性、

完結性、体系性とならんで、プロイセン政府のアルテンシュタインの支持をえて1820年代には多くの人びとを集めていた。ドイツではカントが哲学革命の道をひらいた。この革命はフイヒテによって続けられ、ヘーゲル哲学のなかにドイツのブルジョアジーの立場と役割にふさわしい自己の表現をみ出していた。ヘーゲルの同僚や弟子たちを中心にして、ヘーゲル主義を信奉するサークルがつくられ1826年7月ヘーゲルの自宅で「科学評論協会」が設立された。翌27年正月に、この機関誌として『科学評論年報』が発刊されたが、これは1846年に終刊号を出すまで20ケ年にわたってヘーゲル学派の中心的な機関誌であった。そして1831年にヘーゲルが死ぬまでヘーゲル学派は全ドイツの思想界を支配したのみならず、ヘーゲルの死後約10年にわたって、ヘーゲルの学説はベルリン大学を支配し続けた。「科学評論協会」は3部門（哲学・自然科学部・歴史学部）からなりたっていたが、この3部門にわたるような科学者を動員して協会が作られたということは、ヘーゲルの偉大さはもちろんだが、ヘーゲルの高い権威を示している、というべきものである。ヘーゲルの偉大さは「ヘーゲルの包括的な精神の強さと深さは、その反対者さえも、しかもたがいに極めて異質で極めて対立していて、それを一括するのは、ほとんど不合理であると思われるような反対者さえも、ヘーゲリアンであったという事実¹⁾」のうちに知ることができる。

プロイセンの文部大臣アルテンシュタインはヘーゲル哲学にすこぶる好意的であったから、ヘーゲル学派の人びとが大学の教職につくのを助けた。ヘーゲルの全集は7人の弟子たちによって準備された。彼らはヘーゲルの哲学的業績はまず完成の域に達していると考えていた。したがってヘーゲルの弟子たちはヘーゲル哲学の修正などは考えてもいないし、ヘーゲルが簡略に論じたことを少し精密に仕上げるくらいで満足して、ヘーゲルを擁護しようと努めていた。この7人の弟子のひとりガンズは「ヘーゲルは多くの才能ある人びとを残したが、後継者を残さなかった」といったが

この言葉を証明するようにヘーゲルの死後シェリングがプロイセン反動政府の委託をうけて登場するや、ベルリン大学は「精神的闘争の試合場²⁾」
 になってしまう。というのは、ヘーゲル死後ヘーゲル学派はその急進的なメンバーによる内部批判のため分裂することになるからである。つまり意見の違いがヘーゲル学派の内部から起ったからだ。「現実的なものは理性的である」ということはウイルヘルムⅢ世やその忠良なる臣下の人びとにとっては、まったく好都合な保守主義の弁護の言葉に聞えたに違いない。ということはプロイセン国家がこうして厳然と存在していることは、まさに理性的だからだ、という意味であったろう。しかし「プロイセン国家がもし非理性的ならば現実的にしておかなくてもいい」というウラの意味だっているわけだし、ヘーゲルにはこういう革命的な反面さえある。ゲルツエンがいったように「ヘーゲル哲学は革命の代数学」というような解釈もできる。けっきょくヘーゲル学派は意見の相違から左派と中央派と右派に分裂した。さらに左派は分裂して「フォイエルバッハに続くグループ——マルクスの属したグループ——ができ、いまひとつの他グループにはバウアー家の3人（ブルーノ、エドガー、エグバート）いわゆる『神聖家族』とその友人たちが帰属するようになった。もうひとつ、カスパー・シュミット（シュテイルナーのこと）の代表する一つの傾向³⁾」が生れていく。

右派は「現実的なものは理性的である」というヘーゲルのテーゼを固守して、宗教の伝統的な表現のなかに非合理的なものはありえない、として哲学と宗教の統一にかんするヘーゲルの教義を支持した。左派はこれに反対した。こうして青年ヘーゲル学派が「ヘーゲルの弁証法から出発して、哲学と宗教の和解に反対して、——宗教とプロイセン国家が絶対的真理であるという主張に反対する立場をとったのに対して、右派はヘーゲルの体系と宗教を擁護し、キリスト教正統派の代表者たちといっしょになって青年ヘーゲル学派とたたかった⁴⁾」というような事態がおこったのである。

ヘーゲルの哲学では「宗教イコール哲学」と自己規定される。宗教が表象のかたちで捉えるところを哲学は概念として捉える。この考えかたからすれば、宗教の本質も概念的に捉えられるはずである。ヘーゲルは「宗教・神はそれ自身永久の真理である。つまり哲学は——宗教であり、宗教は哲学である」といった。だからヘーゲルの「哲学全体は哲学的神学であり」⁵⁾ヘーゲルの「歴史哲学は一種の弁神論であり、政治哲学は地上における神聖なものの理解であり、論理学は純粹思惟の抽象的領域における神の提示」⁶⁾なのである。

もちろんヘーゲル流の「宗教イコール哲学」という考えかたに対しては哲学者や宗教家のあいだでも批判はあった。宗教を神秘化するのではなしに、概念的に哲学的に捉えるという発想こそが、じつはシュトラウスをして『イエス伝』を書かしめた理由なのである。またシュトラウスがキリスト教の教義が聖書のとおりならば神話にすぎない——という結論を書かざるをえない理由でもあった。

ヘーゲルは一方では現実のプロイセン国家を理性的なものとして保守的な姿勢を示した。つまり「1821年現在のプロシア国家を論理学上の限定された意味における一つの實在、すなわち内面的本質と外面的存在の直接的合一、誇張された意味での現実的なもの、地上における神的なもの、と了解していた」⁷⁾のであるが、他方ではヘーゲルの哲学の本質は弁証法つまり流れ(werden)の哲学だから革命的内容を含んでくる。この矛盾した内容をつかまえて、左派ヘーゲル学派が主張した原理は「合理的なるものは現実的である、ということであった。そこで左派は右派のオプティミズムに対してペシミズムをもって対抗した。このペシミズムは、いまや時代おくれとなった宗教的表現のなかに秘められている教義を破壊しはじめていた」⁸⁾のである。

ヘーゲルにとっては、宗教は宗教哲学によって哲学と結びついてしまうし、宗教哲学は素朴な信仰と批判的な理性の二ツをとともにもつと高い水準

で理解することができるのだから、福音書の物語そのものは、じつは“つまらぬ” ことと考えていた。

青年というものは、いつの時代でもそうなのだが「未来病にとりつかれ世界を変革しようとする存在であり、現存するものにお構いなしで計画をたて、要求をもち出し⁹⁾」そして現存するものを否定しようとするものだが、青年ヘーゲル学派の連中にしてもこれとよく似た傾向があった。

ヘーゲル哲学の革命的な^{●●●●●}変革は、ベルリンで正統ヘーゲル学派のミヘレット (Michelet) のもとで哲学を勉強したポーランドの伯爵アウグスト・フオン・チェスコフスキー (August von Cieskowski) によって始められた。チェスコフスキーはヘーゲルの体系を「哲学の終焉の始まり」と呼んだ。彼の著書『歴史哲学のプロレゴメナ』(1838)の要旨は「ヘーゲルは現在と過去をあつかっただけであるが、哲学は今や将来をあつかわなければならない……哲学は将来をつくるべく試みなければならない。将来の哲学は社会を目指していなければならない、したがって実践的にならなければならない¹⁰⁾」ということであった。この小著は青年ヘーゲル学派の人びとに実践にかんする種子をまいたことになる。というのは「思索から実践へ」の移行について口火を切ったのはこのチェスコフスキーが最初の人物だったからである。チェスコフスキーの「理論の高みから実践へ降りてこなければならない」という発想は青年ヘーゲル学派を感激させたらしい。バウアーは1841年にマルクスあてに手紙を書いて「理論はいまや最強の実践です¹¹⁾」と述べている。

ところで青年ヘーゲル学派が宗教に関心を寄せた理由はエンゲルスの説明によると「当時は政治はひどく^{●●●}いばらの分野」だったので、論争は宗教を中心に起ったようである。そのうえドイツはブルジョア革命を迎えつつある時だったし、封建社会に反対する闘いは尖鋭化していた時でもあった。ところがキリスト教は封建制度の精神的な支柱であるので、この闘いは先づ宗教にたいする攻撃となって噴出したわけである。当時のプロシア

に「議会制度も政党もなかったため、またプロシアにおける自由主義の担い手であった青年ヘーゲル学派はブルジョアジーのうちになんらの強力な支えをもたなかったため、かれらはヘーゲルの例にならって歴史的発展を精神的発展として把握し、政治的闘争を観念の面に¹²⁾」ひき移したのであった。

マルクスが「哲学と社会にかんする彼の見解をようやく発表するようになったのは、この急速に変わっていく運動の一員¹³⁾」になってからのことである。

マルクスが詩人（水準以下の詩であったが）ないし主観的ロマン主義者からヘーゲル主義へ転向した事情は1837年11月10日の父あての手紙（マルクスの学生時代の残っている唯一の手紙）をみればよくわかる。これまでマルクスはカントやフイヒテの信奉者としてヘーゲルの概念的合理主義を拒否していたのに、いまや理念が現実的なもののなかに内在していることが解り始めた。彼はカント、フイヒテからシェリングを経てヘーゲルに到達したのである。「私の不快（病気）中、私はヘーゲルを始めから終りまで彼の弟子たちの大多数をもふくめて、知るようになっていました。シュトラークラウでの友人たちとのたびたびの集まりを通じて、私はあるドクター・クラブにはいることになったのです¹⁴⁾」と父あてに報告している。

若いマルクスにとって重要な点は、せっかく辿りついたヘーゲル哲学にたいして、「彼がヘーゲル哲学批判という当時のドイツの思想的発展を決定づける重要な問題にはじめてタッチ¹⁵⁾」しなければならなかったという運命の皮肉であろう。1839年にマルクスが学位論文の下準備のために書き込んだノートにはヘーゲル以後の哲学の展望すら書き込んでいる。——むろんマルクスはヘーゲルの直接の弟子ではないから、彼のヘーゲルにかんする知識はヘーゲルの弟子たちの注釈によるものなのだが——ちょうど青竹のような直線的な継続したものにフシがあるように、ヘーゲル哲学もいま

結節点で、これから将来の思想に新しい方向をうち出す必要があることを述べている。

マルクスがヘーゲル批判にふみきったのは1842年春、当時24歳の頃で1842年3月5日および20日付のマルクスからルーゲあての2通の書簡にはヘーゲル哲学批判を企図していたことが察知できよう。このばあい、ヘーゲル法哲学の根本問題である国家と市民社会の関係がマルクスの関心事であったことはいうまでもない。

マルクスは「ヘーゲルを始めから終りまで、彼の弟子の大部分と共に一通り会得」したといったが、ヘーゲルは「その青年時代に経済学とくにアダム・スミスの研究によって注目を一身にあつめていた」¹⁶⁾哲学者であり、マルクスも「ヘーゲル体系をもって、真の労働哲学とみなしていたし、『精神現象学』『法哲学』さらに『論理学』にも取り組みながらマルクスが発見したものは、だから、ただたんにヘーゲルだけでなく、彼をつうじて、そこに同化され、哲学的に翻訳された古典経済学の一部」¹⁷⁾であることも一通り会得していたに違いない。だからマルクスがヘーゲルの国家と市民社会を批判するようになったのはヘーゲルの「欲求や領有の理論あるいは分業の分析といったヘーゲルのなかで永遠に滅びない諸要素」¹⁸⁾を認めていたからであり、これをふまえたうえで批判を狙ったものであろう。

1842年というときエンゲルスは22歳であるが、当時のエンゲルスはやつぎばやに論文を書いている螢雪の時期であるが、マルクスは『ライン新聞』¹⁹⁾の時代であって、共産主義にたいしても批判的な時期であり、さらに1843年9月のルーゲあての書簡でハッキリと共産主義拒否を述べている。²⁰⁾むしろこの時期のマルクスの思想的地平は未だ人間解放の地平であった。

ところでこの時期のマルクスがエンゲルスのいうように「彼は経済学にかんしては絶対になにも知らなかった」²¹⁾のだ、とすればやはりドクトル・クラブの一員として先輩からの指導と、『ライン新聞』の記者時代に現実的な社会問題に対決したこと、パリに来てからはルイ・フィリップ治政下

の進歩主義思想に触れたこと、エンゲルスやヘスを介して労働者との生きた接触、さらには1843年末にエンゲルスが書いて『独仏年誌』に掲載された「国民経済学批判大綱」を読んで衝撃をうけて経済学への関心を深めていったものであろう。じじつルーゲは1844年5月にフォイエルバッハあてにマルクスの努力のありさまを報告しているが「マルクスは実に多くのものを読み、恐ろしいほど猛烈に勉強している」²²⁾「新たな書物の大海に突き進んで行く」²³⁾と。この時期にはマルクスはすでに彼なりの思想的発展をとげていたように思われる。

当時、社会主義と共産主義という用語はドイツではハッキリした区別なしに使われていた。広く注意をひくことになった最初は1842年であった。この言葉が一般の注意をひくようになった原因は、多くの隠れた共産主義宣伝物を『ライン新聞』に掲載したモーゼス・ヘスの宣伝ともう一つはローレンツ・フォン・シュタインの『現今のフランスの社会主義と共産主義』の影響のためである。

マルクスがはじめ共産主義に対して否定的であったことは既に述べたが、マルクスが「共産主義を拒否した最後の日付は、ルーゲへの手紙つまり1843年9月になっており、はじめて共産主義者としての信条告白をおこなった日付は、1844年3月となっている」²⁴⁾から、彼はこの二ツの日付のあいだで思想的発展をとげたに違いない。

青年ヘーゲル学派のうちにシュトラウス(1808~74)、ルーゲ(1802~80)、B・バウアー(1809~82)、フォイエルバッハ(1804~72)、シュティルナー(1806~56)らやマルクスがいたわけだが Hegelinge という彼らの呼称はつまり彼らの革命的な態度を表現しようとしたものであった。当時のドイツを政治的・思想的流派に分けてみると(1)保守主義、(2)政治的カトリック主義、(3)自由主義、(4)急進主義、(5)社会主義と5ツに大別できる。このうち急進思想は知識人のグループに限られていて、そのうちでもっとも重きをなしたのが青年ヘーゲル学派であった。急進主義は「先天的

に革命的であり、人民主権、普通選挙および共和制度にかんする彼らの主張について、いささかも妥協しない」ことを特徴とする。²⁵⁾そしてこの青年ヘーゲル学派の相互のあいだの関係は、相互間でいつも相手を凌駕しようと努力していることであった。彼らは「共通の反対によって、たがいに結びついているだけなので、個人的ならびに文筆上の同盟を解いて別れ別れになることも同様にたやすく、いったん別れると持ちまへの急進主義にに応じて、たがいに＜俗物＞だ、＜反動＞だ、と罵りあう。フォイエルバッハとルーゲ、ルーゲとマルクス、マルクスとバウアー、バウアーとシュティルナー、これらは一組の仇兄弟で、いつおたがいが相手を仇と認識するかは偶然が決定」²⁶⁾したようである。彼らは＜脱線した教養人＞というべきものであって、社会の事情によりやむなく学問上の知識をジャーナリズムに引き移すのである。彼らのほんらいの職業は出資者と出版者と読者と検閲官にたえず従属している自由著述業²⁷⁾」なのである。だから青年ヘーゲル学派は非常にジャーナリスティックな考えをもっていた人たちで「彼らは種々の評論誌に、総計2千頁も執筆する²⁸⁾」ということをやっていた。これらの職業的文筆業というものは、ドイツでは1830年ころからヤット認められるようになっていったものである。青年ヘーゲル学派の運動が最高潮に達したのは1842年で『ライン新聞』は彼らの「急進的表出を指導し宣言したもの」²⁹⁾であった。また青年ヘーゲル学派のすべての評論誌は1845年までに絶滅し、雑誌の発行によって盛えていたこの学派の運動はその存立を止めることになる。

ミシュレ (Carl Ludwig Micheler, 1801~93) が主宰した雑誌『思想』にはヘーゲル左派に属する人びととしてはシュトラウス、ルーゲ、B・バウアー、フォイエルバッハの名が書かれているがヘスやシュティルナーの名はみられない。

小論では青年ヘーゲル学派の通念どおりに、うえに列举した青年ヘーゲル学派の人びととマルクスの関係を述べて初期マルクスの思想形成の理解

を容易ならしめたいと思う。

- 注 1) カール・レヴィット『ヘーゲル・マルクス・キエルケゴール』柴田治三郎訳, 未来社, 1971年, 7頁。
- 2) Heinrich Gemkow, u.a. Friedrich Engels, Eine Biographie, Dietz Verlag Berlin, 1970, S.50. ゲムコフ他『フリードリヒ・エンゲルス伝』土屋, 松本訳, 大月書店, 1972年, 43頁, なおマルクスもシェリングを非難し「シェリング哲学は哲学という姿をとったプロイセン反動政策」と書いている。
- 3) John Lewis, The Life and Teaching of Karl Marx, Lawrence & Wishart, London, 1976, p.64. ルイス『マルクスの生涯と思想』玉井茂ほか邦訳, 法政大学出版局, 1974年, 85頁。
- 4) Gemkow. u. a. op. cit., S.35. 邦訳, 前掲, 31頁。
- 5) レヴィット『ヘーゲル・マルクス・キエルケゴール』前掲, 25頁。
- 6) 同書, 26頁。
- 7) 同書, 21頁。
- 8) David McLellan, Marx before Marxism, Pelican Books, 1972, p.36. マクレラン『マルクス主義以前のマルクス』西牟田久雄訳, 勁草書房, 29頁。
- 9) Karl Löwith; Von Hegel zu Nietzsche, W. Kohlhammer GmHb, 1964, S. S. 78~79. レヴィット『ヘーゲルからニーチェへ』(I) 柴田治三郎訳, 岩波書店, 84頁。
- 10) D. McLellan, Marx before Marxism, op. cit., p.89. 邦訳, 前掲, 96頁。
- 11) チェスコフスキーは1842年, ブルーノ・バウアーを絶賛し, 世界史において宗教改革が重大な事件であるように哲学史におけるバウアーの地位は重要であるといった。マルクスがバウアーの指導に仰ぐところは絶大であった。
- 12) August Cornu; Karl Marx und die Entwicklung des modern Denkens, Beitrag zum Studien der Herausbildung des Marxismus, Berlin, 1950, Dietz Verlag. コルニュ『マルクスと近代思想』青木靖三訳, 1956年, 法律文化社, 82頁。
- 13) D. McLellan, Marx before Marxism, p.38, 邦訳, 前掲, 31頁。
- 14) Marx; Brief an den Vater, M.E.G. W. Ergänzungsband Erster Teil, S.10. (『全集』第40巻, 初期著作集, 10頁)

- 15) Georg Lukács, Der Junge Marx, Verlag Günther Neske Pfullingen, 1965, S.S.7~8. ルカーチ『若きマルクス』ミネルヴァ書房, 昭和46年, 8頁。
- 16) エルネスト・マンデル『カール・マルクス』山内・表共訳, 1971年, 河出書房新社, 9頁。
- 17) 同書, 10頁。
- 18) 同書, 10頁。
- 19) マルクスは1842年10月16日付『ライン新聞』紙上で「今日の姿における共産主義思想にたいしては, 理論的な現実性さえみとめておらず, その実現を願わない」と書いている。
- 20) M. E. G. W. Band, 1. S, 108. (『全集』1巻, 124~125頁)
- 21) 1892年9月28日付, エンゲルスからメーリングあての書簡(または, マンデル, 前掲, 9頁)
- 22) D. McLellan, The young Hegelians and Karl Marx, Macmillan and Co. LTD, 1970, p.44. 邦訳, 前掲, 67頁。
- 23) ibid., p.44. 同書, 67頁。
- 24) マンデル『カール・マルクス』邦訳, 前掲, 12頁。
- 25) D. McLellan, Marx before Marxism, op. cit., p.24. 邦訳, 前掲, 17頁。
- 26) K. Löwith, Von Hegel zu Nietzsche, op.cit., S.80. 邦訳, 前掲, 85~86頁。
- 27) ibid., S.80. 同書, 86頁。
- 28) D. McLellan, Marx before Marxism, op. cit., p.98. 邦訳, 前掲, 109頁。
- 29) ibid., p.108. 同書, 122頁。

2. シュトラウス

シュトラウス (Strauss, David Friedrich) は1808年1月27日, Ludwigsburg に富裕な商人の子として生まれ, 1874年2月8日, 66歳で死んだ。1831年にベルリンに行ってシュライエルマッハーやヘーゲルの門下生たちから指導をうけた。1835年7月, 若冠27歳のテュービンゲン大学教授シュトラウスは『イエス伝』(Das Leben Jesu, 2 Bde, Tübingen

1835～36.)を出した。1835年出版の第1巻ですでにヘーゲル学派の分裂が起った。第2巻(翌年)の出版をまたないでシュトラウスはこれらの批判にたいする準備に忙殺されることになる。また『イエス伝』の出版のち青年ヘーゲル学派の力づよい運動が展開されていく。周知のように、中世にはキリスト伝はあったが、歴史的なイエスにかんする学問的研究などはなかった。少くともシュトラウスの『イエス伝』ほど劃期的なものはなかった。だからこの書物は全ヨーロッパにわたってセンセーションを巻きおこした。

青年ヘーゲル学派の闘争の鋒先(ほこさき)がプロイセン国家のイデオロギー的支柱であったキリスト教に向けられた理由はすでに述べた通りだが、その火ぶたを切った男は、このシュトラウスである。ヘーゲルは「福音書を現実の歴史にとっては多かれ少なかれ、つまらぬ事柄だと説明した。これに対してシュトラウスは異議をとなえ、この物語を概念に還元するならばキリスト教の宗教としての本質が変わってしまうだろうし、この物語こそはキリスト教の宗教としての本質的なものを成している¹⁾」のだ、という。彼は神とは汎神論的に無限なもので、神人イエスとは人類のイデーの実在化したものであり、靈魂の不死(滅)はつまりそのイデーの高揚したもので福音書の物語は原始教団において構想された神話なのだと説明する。彼は福音書の物語を「民衆の深い願望を示す神話とみなした。福音書は彼にとって、ある特定の発展段階に達していた一国民の集団的意識によって生み出された事実についての想像力の所産²⁾」とみる。彼はヘーゲルが福音書の史実性を「つまらぬ事柄」として、その内容の解釈に専念したのに対してむしろキリスト教の本質は福音書の物語のなかにあると考えて、この物語を信心深い人びとの願望を訴える神話と考えた。聖書が存在する以前から宗教はあったはずだし、福音書の作者や使徒らが書く以前に、キリスト教がこの世にあったわけだから、聖書というものは、がんらい宗教的なもの以上の何かをすでに含んでいると考えるべきものである。福音書

イコール宗教ではない。宗教のもつ内的真理とその史実性としての真理を混同すべきではない。宗教が真理であるのは、福音書作者や使徒がそれを教えたからではなく、真理であるからして、彼らはそれを教え伝えようとしたのである。シュトラウスはヘーゲル哲学と宗教との妥協・調和に対して「キリスト教の教義を哲学的概念に還元すれば必ず宗教の内容は根本的に変更される³⁾」とのべた。いいかえると、シュトラウスは「合理的・論理的真理とならんで歴史的現実の存在すること、そしてこの現実は必然的にはその真理と合致するものではないことを示すことによって、宗教は哲学とは本質的に異なることを確立し、ヘーゲルが主張した両者の調和を、またかれの体系の根本にある論理的発展と歴史的発展との統一性をも破壊⁴⁾」したことになる。

シュトラウスは、この結論はヘーゲル哲学ことに、彼の宗教哲学がほんらい的に内包しているものだ、と考えた。だからキリスト教の信仰そのものの本質ということになると彼は何も言っていないのである。繰返していうと、キリストの出生とか、その奇跡とか復活とか昇天ということは史実性という点からみると全く疑わしい点が少くない。しかし信仰という点からみれば真実といっても一向に差支えないわけで、彼の考えは「正統ヘーゲル主義の限界を越えた」（エンゲルス）ものに違いはないが、しかしヘーゲルの地平のなかにおけるヘーゲル批判なのである。

シュトラウスは、むしろ教会の教義を破壊するような気持など少しもなく、ただキリスト教信仰の本質を明らかにしようとしたものにすぎない。彼は奇跡を合理的に解釈することに反対して、神話という言葉を使ってその意味を解りやすくしようと思ったのであろう。彼は、イエスはナザレに育ち、ヨハネからバプテスマをうけ弟子をともなって遍歴したり、説教したりしてメシア王国を紹介したが、パリサイ人の反感をうけて磔殺の刑を受けた——ただ、これだけがイエスにかんして解っている史実で、福音書のほかの記述はみんな信心ぶかい信者が信仰のあまりにデッチあげた神話

だ、と説明した。したがって福音書の敘述はもともと歴史的批判（史実性）にたえるほど正確なものでないということを証明したことになる。彼の批判は「余りに大胆であったから、それを直ちに真似る者は出て来なかった⁵⁾」が、それから5年ののち B. バウアーは福音者のなかのすべての物語は福音書作者たちによって捏造（ねつぞう）されたものだ、といい出した。『イエス伝』（第1巻）が出ると、彼の大学の機関誌の『テュービンゲン神学評論』は猛然たる反駁をくわえ、1836年だけでその機関誌の400頁はシュトラウス批判の記事にあてられたくらいであった。反対に彼に同調する意見をもつ人も出てきた。たとえば当時18歳だったエンゲルスは「僕はシュトラウス派だ⁶⁾」といってシュトラウスの『イエス伝』をもって宗教と対決する道標としたくらいである。バウアーもシュトラウス派に違いはない。だから『イエス伝』はヘーゲリアンを敵、味方にわけることになっていく。

1840年になると『イエス伝』は第4版を重ねるにいたった。シュトラウスの立場はヘーゲルがまだスイスのベルンにいた頃の、つまり道徳的天才としてのイエスをみる『イエス伝』である。そして彼の最後の著書『旧信仰と新信仰』（1872）ではキリスト教を人道主義（ヒューマニズム）へ形成することを目標とする道徳説をとる。そして神のかわりに全もしくは宇宙を説くが、彼の見解は当時としては大きな反響をもたらすものであった。しかし要するに彼の基本的態度はやはり観念論であって、取扱ったものは主として精神的過程であり、ヘーゲルの地平を超えてないものであった、ということができる。

シュトラウスのいう「神人すなわち人類」という考えは、ふるくからあった。「人間の理性は神の理性の分与」という思想もふるくからあった。人間ひとりひとりが神の理性の分与をうけているのだから、類としての人間を想定すれば「神イコール類」というテーゼが出てくるであろう⁷⁾。

このシュトラウスのテーゼを延長したものが B・バウアーであり、フォ

イエエルバッハであり、その人間学なのであるということも理解できよう。⁸⁾

- 注 1) A・コルニュ, W・メンケ『モーゼス・ヘスと初期マルクス』武井勇四郎訳, 未来社, 1972年, 18頁。
- 2) D. McLellan, The Young Hegelians and Karl Marx, op. cit., p.3. 邦訳, 前掲, 5頁。
- 3) D. McLellan, Marx before Marxism, p.37. 邦訳, 前掲, 30頁。
- 4) コルニュ『マルクスと近代思想』前掲, 84頁。
- 5) E. H. カー『カール・マルクス』前掲, 30頁。
- 6) Gemkow. u. a. Friedrich Engels, S.35. 邦訳, 前掲, 31頁。
- 7) 類 (Gattung) という概念は, フォイエルバッハが類的本質として, よく使っているが, じつは『イエス伝』でシュトラウスが使ってから青年ヘーゲル学派で流行するようになった。シュトラウスは「ひとりの個人, ひとりの神=人に属するものとして考えられるとき, その資質と, 教会の教えをキリストのおかげだとする機能とは矛盾する。しかし類においては両者は調和して生きている。人類は両者の本性の結合であり, その無限性を記憶する有限な精神である」(Das Leben Jesu, Tübingen, 1860, II. S. 734ff.) とのべている。
- 8) バウアーの『共観福音書批判』は, シュトラウスの『イエス伝』に用いられた方法をいっそう大胆に用いたものである。

3. ルーゲ

ルーゲ (Arnold Ruge) は 1803 年 9 月 13 日, プロイセンの北海岸の Bergen で生まれ, 1880 年 12 月 31 日, 77 歳で Brighton で死んだ。彼は始め神学を修めるつもりだったが哲学に転じハレ大学に学んだ。学生時代に学生組合の陰謀に参加して露見したため 6 ヶ月間投獄されたことがある。ルードウィヒ・フォイエルバッハの次兄のカール・フォイエルバッハがルーゲと共に秘密同盟結成の疑惑がかかって 1824 年 5 月逮捕されて獄中で発狂して 2 回も自殺企図をしたのはこの時のことである。ルーゲは 1830 年ハレ大学でプラトンを講じた。もともと彼はヘーゲルの弟子ではなく, ヘーゲル哲学を学びながらヘーゲルの帰依者になった男である。政府が反動政

策のため、彼を教師にすることを拒んだため、同僚のエヒターマイヤーと一緒に1838年から『ハレ年誌』の編集に没頭した。

ルーゲという男は「まぎれもなく、ジャーナリスト¹⁾な才物」で、マルクスのジャーナリズムに対する関心も、もともと「ルーゲによってはじめ²⁾て目ざめさせられた」ものなのである。とくに独創的な男ではないが青年ヘーゲル学派の中心人物で、交際も広く筆も速く文章も巧く、家も富裕だったから編集という仕事は彼にはピッタリだった。彼は「ヴォルテール主義者であり非宗教的道德論者であり世界主義者であり、ヘーゲル主義を18³⁾世紀における合理主義の頂点とみていた」人物であった。

『年誌』の初期の論文とくにルーゲの論文はすべてプロイセン国家に好意的であったうえ「ヘーゲル学派たちは依然として師（ヘーゲル）に忠⁴⁾実」であることを示していた。ところが宗教問題になると、彼らの見解や態度はまったく変り、むしろシュトラウスや自由な宗教批判を弁護さえした。1840年代には政治論文が掲載されるようになった。そのうえルーゲやこの『年誌』は青年ヘーゲル学派から鼓舞激励をうけるようになっていく。というのはルーゲの文章の背後に「現存の秩序と文化とへの正統派的な忠⁵⁾誠を掘り崩す左派的に解釈されたヘーゲルの弁証法的哲学」があったからなのである。

この青年ヘーゲル学派の中心こそドクトル・クラブといわれた集団であった。マルクスの先驅としてのルーゲの業績という、彼のヘーゲル国家哲学（『法哲学』）の批判がある。彼の『ハレ年誌』はむしろ文芸に力を入れた新聞で幅広い寄稿家をもっていて、けっして反政府的なものではなかった。ルーゲはブルーノ・バウアーの見解を高く評価してバウアーを編集の中心にすえていた。ところが宗教問題をキッカケにして、まず反動派と対立し、次いでプロイセン国家権力とも対立するようになる。この点はルーゲがシュトラウスの考えを支持していたことも原因している。彼はこれまでは「主に哲学的・宗教的性格をもっていた批判に政治的方向を与え

てきたという功績をたてた。ルーゲの政治活動はヘーゲル的な根本的見地を踏まえて、まことにやさやかな改革案をもって出発した⁶⁾」のであり、彼の改革案の骨子は「プロイセン国家は自由主義的な変容を経なければなら⁷⁾ない。この変容は何はともあれ、宗教改革および啓蒙の自由な原理の相続者としてのプロイセンの本質に全くふさわしい」ものでなければならないという見解であった。この改革案は反動政府を刺激したことはいうまでもなかろう。『ハレ年誌』は1841年に政府の脅迫と強制でプロイセンからザクセンに移され、そののち『ドイツ年誌』と改名された。青年ヘーゲル学派による宗教と政治にたいする批判の場所こそ、この『ドイツ年誌』であった。ドレスデンで発刊を続けながら『ドイツ年誌』は、いよいよ反政府的立場をかためていく。1841年の半ばにはB・バウアーは常時執筆者になった。マルクスはしばしば『ドイツ年誌』に執筆していたケッペンによって、ルーゲに紹介された。1842年2月10日、マルクスは「検閲訓令批判」の論文を同封してルーゲに送った。その時マルクスは「年誌のため、私の力のおよぶかぎりのことはするつもり⁸⁾」と書いている。レヴィットは「ドイツ哲学は現在にいたるまで批判の鋭さと打撃力と精神政策上の効果において、この雑誌（『ドイツ年誌』）に匹敵するようなものを未だに出していない⁹⁾」と賞賛しているくらいだから、当時の青年ヘーゲル学派がいかに競いあって勉強していたかがわかるであろう。

この『ドイツ年誌』も1843年正月3日には発禁になってしまうのだが、考えてみると1841年という年は、フォイエルバッハの『キリスト教の本質』にしるバウアーの『最後の審判ラッパ』（マルクスが出版を手伝っている）にしる、ヘスの『ヨーロッパの三頭政治』にしる、みんな1841年に公刊されているから、いいかえると青年ヘーゲル学派がいっせいに批判の砲門をひらいた年こそ1841年ということになる。ところでフォイエルバッハの書いた『キリスト教の本質』はルーゲには甚大な影響を与えた。しかしルーゲがフォイエルバッハを本当に理解したかどうかは疑問であるが、

ともかくルーゲは「人間の宗教的理念は、地上ではまだ実現されておらず、そのため彼岸に反映された社会の理想である、というフォイエエルバッハの考えから、ルーゲはその対象が歴史の進歩とともに前進する人間精神である政治の宗教をひき出した¹⁰⁾」といわれる。

マルクスがケルンで『ライン新聞』の編集員になるまでは、資本主義の現状やドイツの工業や農業についての知識は乏しいものであったように、一般に青年ヘーゲル学派の連中は経済政策や社会問題にとり組むだけの具体的知識をもっていたかどうかは疑わしい。ところがルーゲだけは「哲学が抽象態から歴史的現実に向っていけば、哲学は事態を誤った方へそらせることになる¹¹⁾」と気が付いていたから「哲学と現実政治の同盟」というようなことをいい出したわけなのである。

1842年4月27日付のマルクスからルーゲあての手紙によると「あなたに4つの論文をお送りするでしょう。1.『宗教芸術について』、2.『ロマンティッカーについて』、3.『歴史法学派の哲学的宣言』、4. 私がほんの少しおだてた『積極的哲学者たち』これらの論文は内容的につながっています¹²⁾」と述べているようにマルクスはルーゲに4つの作品を約束している。このうち3番目のものだけが印刷されることになる。またマルクスはルーゲのために力のこもった論文「プロイセンの最新の検閲訓令にたいする見解」(1842)を書いて出版の自由を重要な問題として取りあげたこともある。『ライン新聞』に掲載されたこの論文にたいしてルーゲは「あの記事はこの問題について書かれたもののうち最上のもの」とマルクスに書き送っているくらいで、この辺では読者はマルクスとルーゲがいかに親密に協力しあっていたかを容易に納得できるであろう。『ドイツ年誌』がはなばなしい活動ののち発刊停止の処分をうけることになることは既に述べたとおりだが、そののちルーゲは「もういちど牢獄にはいるのが厭なのでパリに逃げ、それからスイスへ、さいごにイギリスへ落ちのびて¹³⁾」いった。ルーゲは1843年8月のはじめパリに到着している。ここでマルクスと協同

して『独仏年誌』の創刊にとりかかることは周知のとおりであるが、ただ次のことを付けくわえておく必要がある。つまり「ルーゲは『独仏年誌』のため1千株の募集を始めたが、引受けられたのは僅か拾株だけで、かれ自身かなりの金額を寄付しなければならなかった¹⁴⁾」という経済的負担の問題がまず存在した。『独仏年誌』の発行場所をパリに決めるまで色々と悶着があった。ルーゲとマルクスはシュトラスブルグを主張し、フレーベルはブリュッセルかパリを提案した。ところがシュトラスブルグでは実施不可能ということがスグ解ったからパリに決まった。フレーベルという男はチューリヒの大学の鉱物学の教授であったが、ヘルヴェークの詩を出版するために1841年末から出版業に着手した人物で、『アネクドータ』もフレーベルのおかげで出版されていたし、B・バウアーもE・バウアーの著書もフレーベルのところから出版されることになっていた¹⁵⁾。

ルーゲは1843年8月、モーゼス・ヘスと一緒にパリに到着したが、ルーゲはパリを眺めて「われわれはヨーロッパの発祥の地であり、世界史が念入りに仕上げられつつある大実験室であるパリ」と書いた。おそらく彼の文筆の才をこの『独仏年誌』に托して希望に夢みていたのであろう。ところが『独仏年誌』発刊のため少なからぬ投資をした彼みずから雑誌のために寄稿者を探がさなければならぬうえ、フランス人に接近するためには自分たちの思想や主張すべき点をあらかじめハッキリさせておかなければならないわけだから、ルーゲ、マルクス、バクーニン、フォイエルバッハらは先ずこの点にかんして手紙の交換をした。ところが、この結果たるや「ルーゲとフォイエルバッハはドイツにおける革命の可能性について悲感的であり、バクーニンは革命を唯一の解答と考えており、他方マルクスは未来に対して全く非期待的で、真の民主主義に望みをかけ¹⁶⁾」ているようなありさまで寄稿予定者と思われるもののうちに「学説の一致はほとんどなかった¹⁷⁾」という状況だったしヘスにしるバクーニンにしるルーゲもフレーベルもヘルヴェークもマルクスもエンゲルスも、彼らの「ほとんどが

急進民主主義者と呼ばれれば満足していたであろう。一般にかれらの見解があいまいであったことは、1843年末にヒューマニズム、民主主義、共産主義という言葉がほとんど交換可能的に使用されているという事実によって¹⁸⁾はっきりと示されて」いたのであった。

マルクスの『独仏年誌』に寄稿した論文のうち「ヘーゲル法哲学批判・序説」は1842年にルーゲが書いた「ヘーゲル国法論批判」に相当影響されている。この意味でもルーゲはマルクスの良き指導者であった。1842年ごろ、早くもルーゲはヘーゲルの法哲学を批判的に検討する必要を感じて法哲学の立場からヘーゲル批判を企図したのであった。この発想はバウアーらの宗教的立場からするヘーゲル批判とは違うのである。だからルーゲはマルクスの良い先達だというべく、マルクスもこの時期ではバウアーよりもルーゲ寄りの立場であったと思われる。(1842年、43年ごろのマルクスからルーゲあての書簡がよく証明している)。ルーゲがマルクスを高く評価していたことも確かで、彼はマルクスよりも16歳も年長であったがルーゲは弟にあてて「マルクスは偉大な知性をもっている……彼の協力によって『年誌』をつづけることは、まったく自然なことだ¹⁹⁾」と書き送っていることから納得される。

またいよいよ『独仏年誌』が創刊されることにきまって、ルーゲがいかに熱心に編集の仕事にとりかかったかは彼が1843年7月23日にフォイエルバッハの自宅を訪門して執筆を依頼していることからみても明らかであろう。(マルクスがフォイエルバッハに手紙を書いて執筆を依頼したのは10月3日である。／)

マルクスはルーゲあてに1843年3月13日付で手紙を送って『独仏年誌』ということなら、「それこそ原理であり、一貫した出来事であり、またそれに熱狂できるような企て²⁰⁾」であると述べて、ドイツとフランスの知的協業(この考えは、フォイエルバッハがずっと主張していた)という『独仏年誌』の企画には全面的に協力を誓っている。だから「どんな条件のもと

でも私は『ライン新聞』には、とどまらないでしょう²¹⁾」とさえ書いている。

当時のマルクスの経済事情の困窮さは、あらためて述べる必要もないほどであったが、それならば何故ルーゲとマルクスがこんなに親密に協力したのに『独仏年誌』がタッタ1冊の合冊倍大号（初版3千部）を出しただけで発刊中止となり2人が「絶交」という最悪の事態に追い込まれたのであろうか。

先づ『独仏年誌』に対する2人の企図つまりドイツとフランスとの知的協業のための機関誌——フランスの粗雑な理論をドイツの高遠な哲学によって啓発してやろうという自負（うぬぼれ）はフランス側にとっては、まったくナンセンスなことであった。ルイ・ブランなどは「ドイツはまず、ご自分の内的統一をやったほうがよかろう」とさえ皮肉にいったくらいだったし、フランスの論客たちは『独仏年誌』などに誰一人として寄稿しなかった。ドイツ人の寄稿者だって、ごく限られたものだし、ドイツ語の『独仏年誌』がフランスで飛ぶように売れるわけがないし、ドイツに持ち込もうとすれば国境線でほとんど押収されてしまうという仕末で、フレーベルは「それ以上の協力を一切拒否した。資金の欠亡はまたルーゲとヘスの不和を一そう悪化させ²¹⁾」たばかりか「金銭上の困難はまたルーゲとマルクスとの不和を烈しいものにし、ルーゲは雑誌の何冊かで彼に支払うということまで²²⁾」しなければならない結果に終わったのである。ルーゲ、マルクス、ハイネ、ベルナイスらに逮捕令状が出るという有様であった。もう一つには、ルーゲの病気のことがある。ルーゲの病気は文筆家にあり勝な『うつ病』であった。じっさい「雑誌の準備をしていた期間中、共同編集者のルーゲは病気のため、ほとんど何の役割も果していなかった²³⁾」のは事実である。もう一つ。ルーゲがマルクスらの論文の表現・手法が気に入らなかった。ルーゲは「学理的論文が重要であることを認めたが、あるものは荒っぽすぎるし、マルクスのは余りに様式化され風刺詩的（警句好き）で出来が悪いと考²⁵⁾えた」ようである。もちろん表現様式だけの問題で全般

的にはルーゲはマルクスの論文内容には賛成だったことはいうまでもない。もう一つ。詩人ヘルヴェークの放蕩問題に対する二人の見解の対立がある。ルーゲは「ヘルヴェークの放蕩的な生き方を、それが彼の詩才の妨げ²⁶⁾となっている」といって批判した。このことがマルクスを不快にさせ²⁶⁾たようである。さらにもう一つ。シュレジアの織布工の暴動にたいするマルクスとルーゲの見解の対立がある。『フォアヴェルツ』紙に書いたルーゲの記事を読んで、マルクスはルーゲという男の社会的、経済的出来ごとにかんする理解がもともと不十分なのだ、と思った。だからルーゲには出現しつつある社会的諸勢力の重要性が弁別できないで、シュレジアの織布工の反乱も局地的事件ぐらいとしか認めることができないでいるのだ、と考えた。

1844年5月、マルクスは手紙でルーゲと正式に絶交した。ルーゲはまた「ヘスやバクーニンとさえも疎遠になった。1845年ギゾーが彼のパリからの追放を命じたとき、彼はチューリヒに定住して自分の選集版の編集を始め、このようにしてルーゲは以前の同僚たちとの接触を失²⁷⁾って」いった。1850年、さいごにルーゲはイギリスにのがれて同地で30年の余生を送った。

マクレランによると「この絶交の後でさえ、マルクスとルーゲの思想上の差違はあまり明らかでない」ばかりか、ルーゲが当時書いた小作品『人間、一つのスケッチ』（Der Mensch, eine Skizze）などは「マルクスの『パリ手稿』の思想と酷似した思想が示されて」いるそうである。マルクスの『パリ手稿』は周知のようにマルクス主義の真髓といわれるものであるから、1844年当時のルーゲとマルクスが真髓を模索しながら思想的に競いあった線上に並んで相手を凌駕することに努めていたことがわかったと思う。バウアーにも同じことがいえる。

今回は与えられた紙幅の関係で、バウアーやヘスについても触れることができず、次回にゆずる。こう考えるとマルクス主義の本質的基盤はバウ

・・・・・
アー指導下で青年ヘーゲル学派時代に完成されていたものではないか。

- 注 1) K. Löwith, Von Hegel Zu Nietzsche, op. cit., S.80. 邦訳, 前掲, 86頁。
- 2) D. McLellan, Marx before Marxism, op. cit., p.98. 邦訳, 前掲, 109頁。ルーゲはフォイエルバッハに『ハレ年誌』に寄稿の意志があるかどうかを問い, フォイエルバッハは同意した。これがフォイエルバッハが青年ヘーゲル学派に関係するようになる糸口となった。
- 3) J. Lewis, The Life and Teaching of Karl Marx, op. cit., p.29. 邦訳, 前掲, 33頁。
- 4) D. McLellan, The Young Hegelians and Karl Marx, op. cit., p.14. 邦訳, 前掲, 21頁。
- 5) J. Lewis, The Life and Teaching of Karl Marx, op. cit., p.29. 邦訳, 前掲, 33頁。
- 6) A・コルニユ, W・メンケ『モーゼス・ヘスと初期マルクス』邦訳, 前掲, 21頁。
- 7) 同書, 21頁。
- 8) M. E. G. W. Band 27, S.369. (『全集』27巻, 「マルクスからルーゲあて」1842.2.10日付, 341頁)
- 9) K. Löwith, Von Hegel zu Nietzsche, op. cit., S. 99. 邦訳, 前掲, 110頁。
- 10) D. McLellan, The Young Hegelians and Karl Marx, op. cit., p.95. 邦訳, 前掲, 150~151頁。
- 11) J. Lewis, The Life and Teaching of Karl Marx, op. cit., p.29. 邦訳, 前掲, 34頁。
- 12) M. E. G. W. Band. 27. S.402. (『全集』27巻, 「マルクスからルーゲへ」348頁)
- 13) Löwith, Von Hegel zu Nietzsche, op. cit., S.82. 邦訳, 前掲, 88頁。
- 14) D. McLellan, The Young Hegelians and Karl Marx, op. cit., p.34. 邦訳, 前掲, 51頁。
- 15) McLellan, Marx before Marxism, op. cit., p.135. 邦訳, 前掲, 155頁。『アネクドータ』という雑誌はもともと『ドイツ年誌』のために書かれたのに, 検閲のために断わられた諸論文を集めて, スイスでルーゲが編集したもので, 1843年2月発刊した。

- 16) McLellan, *The Young Hegelians and Karl Marx*, op.cit., p.37.
邦訳, 前掲, 56頁。
- 17) *ibid.*, p.34. 同書, 51頁。
- 18) *ibid.*, p.34. 同書, 52頁。
- 19) McLellan, *Marx before Marxism*, op. cit., p.136. 邦訳, 前掲,
156頁。
- 20) M. E. G. W. Band, S.416. (『全集』27巻, 「マルクスからルー
ゲへ」361頁)
- 21) *ibid.*, S.418. (同書, 362頁。)
- 22) McLellan, *The Young Hegelians and Karl Marx*, op. cit., p.40.
邦訳, 前掲, 60頁。
- 23) *ibid.*, p.40. 同書, 60頁。
- 24) *ibid.*, p.p.40~41. 同書, 61頁。
- 25) *ibid.*, p.41. 同書, 61頁。
- 26) *ibid.*, p.41. 同書, 61頁。
- 27) *ibid.*, p.41. 同書, 62頁。